

函館医学校記録（生徒資料より）

石崎 達

諸 言

著者の祖父石崎鼎吾は函館医学校に官費生徒として入学し、ノート・日記その他の資料を残しているので、関係文献を参考にして同医学校の実態の一部を解明する。

一、函館医学校設立までの経過

藤田の著書より引用すると明治二年（一八六九）黒田清隆らにより函館の幕府軍が鎮圧されると、同年に明治政府は（北海道）開拓使を設置し、本庁を札幌に設立したが、医学と医療の中心地は函館であつた。⁽¹⁾

さきに幕府脱走軍は箱館府民病院を設立したが、之を引継いで開拓使直営の中心病院として官立函館病院が明治二年に発足した。⁽²⁾

同病院の運営に就ては開拓使が大学東校に相談して医員官等を定め、大学中助教馬島春庭（讓）を一等医に任じ院務を掌握させた。⁽²⁾ 明治三年閏十月（陰曆）函館病院は大学東校所屬となり、北海道全道各病院を統轄した。同四年七月院舎を愛宕町に新築移転し、同年十一月大学東校を離れて開拓使直轄に復帰した。⁽²⁾

当時の医官は馬島讓・深瀬鴻堂・青柳直道・桑島愛・藤田玄洋の五名で、薬局は佐藤春亮・田巻松永・村山折三・後藤厚の四名である。⁽²⁾

黒田清隆らは米国大統領グラントと議して政府要人の一人であるケプロンを北海道開拓使顧問に迎え、同氏は明治四年四月（一八七二）に顧問団を率いて着任した。⁽¹⁾

スチュアート・エルドリッジは顧問団に参加し、ケプロンの秘書兼外科医として明治五年四月（一八七二）二十八歳で来日し、函館病院外科部長に着任した。彼の雇用期間は明治七年十一月（一八七四）までである。⁽¹⁾

函館医学校はエルドリッジの希望により実現した。従って函館医学校は明治五年八月（一八七二）に発足し、彼の離任と共に終了したと考えられる。同医学校は彼一人により運営された。彼は同時に病院の改良、設計、運営などについて功績を残している。⁽¹⁾

明治六年（一八七三）函館病院からの提出書類では官費生九名、自費生六名、通学生二名計十七名となっているが後述鼎吾（生徒取締拜命）の記録では二十名である。

本多公敏はエルドリッジの講義を通訳した医師で、彼の著書『近世医説』の訳者でもあるが、彼の記録では講義日程は次の通りである。⁽³⁾

月曜より土曜まで、毎日午後二時間ずつ各課を講義し、余課として生徒の学力に応じて毎朝八時より九時に究理書や文典を学ばせ、十時〜午後二時まで治療を見学させ、夜間原書の輪読をしていた。また外科部長として診療及び手術をしている。⁽³⁾

鈴木要吉の「明治十年前後の日本医学界」には開拓使庁御雇教師函館医学校教授エルドリッチとある。⁽⁴⁾

エルドリッジは明治七年十一月に函館病院を満期辞任しているが、石崎鼎吾は明治八年春（後述）函館地方の種痘巡回に約五十日間従事し、その後父の重病で帰郷し、その死亡と家族の事情により、開拓使長官黒田清隆宛に中途退学願を

呈出しているので、医学校がエルドリッジ離任後続いたのか否か不明である。更に鼎吾は明治十九年にエルドリッジ(当時横浜十全病院外科部長)より医師適格者の英文証書(後述)を受け取っている。

鼎吾の願書により官費生は修業後五年間北海道で医療に従事する義務があったことがわかる。

二、スチュアート・エルドリッジ略歴

武内博編『来日西洋人名事典』⁽⁵⁾によれば Eldridge Stuart (1833—1901) は米国ペンシルバニア州フィラデルフィア生まれ、南北戦争で北軍ウイスクンシン義勇軍に従軍した。のちジョージタウン大学医学部に学び、一八六八年MDの学位を受け、解剖学の助手・講師を務め、一八七一年八月開拓使顧問ケプロンの秘書兼外科医として来日した。

エルドリッジは明治五年四月(二八七二)函館病院に外科部長として赴任し、彼の希望により医学校を創立し、また病院改善に多大の功績を残して、明治七年十一月(二八七四)満期辞任し彼の医学校における教育は終わった。その後横浜十全病院外科部長に迎えられ、また中央衛生委員会委員の役も果たした。⁽⁶⁾

明治三十年(一八九七)日本政府より勲四等を贈られ、同三十四年(二九〇一)死去により勲三等を更に贈られ、横浜市山の手の外人墓地に埋葬された。⁽⁶⁾

三、函館医学校講義内容

本多公敏⁽³⁾によれば授業日課は次の通りであった。

月曜辰 治療学 火曜辰 生理学

水曜辰 外科学 木曜辰 解剖学・眼科学

金曜辰 薬剂学 土曜辰 産科婦人科学

しかし鼎吾のノートからは更に舎密学（生化学）、医事政治学（法医学）が加わる。

エルドリッジは英語で講義し、通訳者が日本語に訳し、生徒はこれを速記して、夜清書した。筆記には鉛筆及び筆を使用した。通訳者は医師で章克己(7)と本多公敏がわかつている。鼎吾は清書したものを一部自製本とした。(7)後述のように本多公敏が訳した『近世医説』も保存してある。

四、生徒名簿(8)

鼎吾は履歴書のごとく生徒取締を拜命しているので生徒名簿を作成した。外の資料では十七名であるが、この名簿は二十名で出身地が書かれている。申二十三歳などあるは明治五年作成の年が申年のためで、当年の年齢を指している。

生国陸奥国北郡青森県管下田名部 中沢 格

申二十三歳

生国羽後国秋田郡秋田県管下槇山銅山 槇山 淳平

申二十三歳

生国渡島国津軽郡青森県管下福山 田沢 謙

申二十二歳

生国武蔵国埼玉郡埼玉県管下忍 阪本 章

申二十三歳

生国能登国珠数郡七尾県管下上戸村 渡辺 豊

申三十一歳

生国岩代国会津郡若松県管下若松 六角謙吉

生国下野国都賀郡栃木県管下壬生

申 十八歳

石崎鼎吾

申 二十四歳

生国播磨国飾東郡飾磨県管下姫路

阪井訥蔵

申 十七歳

生国岩代国会津郡若松県管下

馬島 直

申 十四歳

以上は官費生九名で『函館医師会史』⁽²⁾（函館病院記録）と一致する。以下私費生である。私費生の氏名は必ずしも病院記録と一致しない。

生国越前国吉田郡足羽県管下稲田

片山 繁

(年齢記載なし)

生国陸中国閉伊郡盛岡県管下

佐々木康介

申 十八歳

生国渡島国津軽郡青森県管下松前福山

下山 博

申 二十歳

生国後志国岩内郡岩内

小河三省

申 十八歳

生国膽振国有珠

邨山拓三

生国渡島国津軽郡青森県管下松前
申二十三歳
秦 融作
申 十八歳

生国渡島国檜山郡青森県管下江差
栗崎貞三
申 十五歳

生国渡島国津軽郡青森県管下松前
村岡 格
申 二十歳

明治五年壬申九月

仙台 富塚謙吉

越後 田卷松栄

会津 新屋良定

私費生で「函館市医学史名簿」と一致するのは村岡格、小川(河)三省だけで、その名簿では石井収平、石井貞三、河内啓迪、遊佐泰三郎と、通学生として梅本祐斉、赤城昌英の名がでて⁽²⁾いる。

五、石崎鼎吾に関する履歴と記録

石崎鼎吾(鼎五)は現栃木県下都賀郡壬生町の壬生鳥居藩(三万二千石)の軍師・郡奉行の松本五郎兵衛兎角の二男で、嘉永二年十一月八日(一八四九)に生れた。成人ののち、母テイの生家で御殿医筆頭の石崎正達(兄)に子なきたため養嗣子となり石崎家を相続した。

石崎家は明和元年（一七六四）、初代寿見が藩主鳥居忠意に仕えて代々御殿医を勤め、鼎吾が六代目である。

鼎吾自筆履歴書^⑨

栃木県士族 石崎鼎吾

一、明治三年三月ヨリ同四年五月迄

東京官立医学学校ニテ理化学修行

一、明治四年六月ヨリ同五年三月迄

軍医總監松本順方ニテ解剖生理薬剤内外修行

一、明治五年五月七日開拓使官費医学生拜命

御雇教師ドクトル・スチュアート・エルドレーヂ氏へ随従、八年三月迄函館病院ニテ理化解剖生理薬剤内外科裁判

医学大意原他婦人科小児科等口授相受候事

一、生徒取締申付候事

明治六年一月 開拓使

一、生徒取締向尽力ニ付金三円五拾錢下賜候事

明治七年七月十二日 病院

一、御用有之亀田、茅部、上磯三郡江巡回申付候事

明治八年三月廿三日 開拓使

一、依願職務差免候事

明治八年六月 開拓使

一、明治八年六月 東京本所緑町四番地江開業

（後略）

本履歴書で官立医学校とは幕府時代の医学所が大学東校となり、更に東京大学医科大学となる経過中の大学東校を指すものである。⁽¹⁰⁾

松本順（良順）は大学東校の創立者の一人であるが、別に弟子を養成していた。即ち松本良順の蘭疇舎の記録によれば明治四年十二月五日入門石崎鼎五二十三歳とある。したがって官費生として函館医学校に入学したのは松本良順の指示があつた可能性がある。⁽⁴⁾ 鼎吾は種痘実施のため三郡巡回⁽¹⁰⁾をしているが、命令者は院長の馬島讓先生であり、明治八年にはすでにエルドリツジは解任され函館を去っている。

ところが巡回直後に実父松本兎角重病のため帰国し、その死亡により支障をきたし退学願を出している。学校は閉鎖または終了していたと思われるが後記の文面からは、官費生は修学後五年間北海道に於て医療に従事する義務があつたことから、それが不可能になり退学願を出したのか、医学校の終了については不明な点がでてきた。

退学願は左記の通りである。⁽¹¹⁾

「臣鼎五謹テ開拓使長官黒田清隆閣下ニ上書ス臣鼎五明治七年二月二十五日函館ニ於テ医学修行生命セラレ教師エルドレーヂ氏へ随從修行シ成果ノ上ハ五箇年北海道へ従事シ彼地へ編籍シ万分ノ一ヲ報セント欲スルノ際養母ヲ依頼シ保護スル実父松本兎角大病ノ旨告ケ來ル因テ函館支廳ニ請テ看護ノ為メ帰省ス然ルニ実父終ニ死セリ就テハ養母ヲ保護シ臣鼎五ガ留守ヲ掲載スル者ナク且養母毛老ノ餘臣鼎五ト共ニ北海道ニ航スルヲ肯セス然ルトキハ微忠ヲ北海道ニ尽スレ能ハス微忠ヲ北海道ニ尽サント欲スレハ養母ヲ養フニ能ハス進退茲ニ窮ス願クハ臣鼎五カ孤愚ナルヲ憐レミ修行料ヲ返納シ前条ノ鄙意ヲ聴ン医学修行生ヲ免セラレンコトヲ請フ伏テ待斧誠惶頓首頓首

印

開拓使医学修行生

明治八年

石崎鼎五

第八月

開拓使長官 黒田清隆閣下

願之趣聞届候事

但修行料之外校中費用ハ不及返納事

明治八年十月十五日

開拓長 官黒田 清隆印

本文は北海道開拓使本庁に呈出したのち、本人に返却されたもので、修行費その他返納に不及とあり、黒田清隆印が押されてある。ただし、本文中に修行生の認可？ が明治七年となっているのは履歴書と合わない。

六、エルドリツジの講義記録

鼎吾は各科別にノートを作成しているが、外科のノートが発見されず、ここで引用できるのは一部分であるが、講義の型式と内容を推察できる。ノートは和紙に筆書きし、和綴で製本してある。通訳は前記本多公敏の外に章克己⁽⁷⁾の名あり、大西⁽⁶⁾によれば六角謙吉も通訳したように書かれている。

(一) 医学政事科⁽⁷⁾ (ノート頁数七十一頁)

米国 越尔度麗実氏 口授

総論

医事政事科ハ是レ医ノ以テ缺ク可カラサルノ学科ナリ然シテ独リ医ノミ之ヲ要スルニ非ラサルニ專ラ簡約ヲ主トスルナリ

夫レ此学科ノ裁判吏ト巡查吏トニ至要ナル所以ハ先ツ一躰ノ死者ヲ得テ未タ医ヲ迎ヘサル前ヘ預メ之ヲ点檢セスンハアラサルカ故ナリ尤モ或ハ俗吏ニ裁決シ難キ所アリ此レハ是レ医士ノ裁決ヲ受ケサルヘカラス是ニ至テ医士ノ任タル者ハ死者ノ性命ニ關係スル事ト及死者ノ貧富ニ關係スル事ノ二般ノミ現今日本ノ法律ト各国ノ法律ノ差等アリ故ニ之ヲ各国ノ法律ニ比シテ論ス可シ

死者ノ性命ニ關係スル事ニ於テ先ツ其例ヲ挙ケンニハ譬ヘハ二人手ヲ以テ互ニ搏撃シ誤テ一人打撲サレテ死人而メ之ヲ檢スルニ既ニ命ヲ落セリ此時ニ当テ医事政事科ヲ学ハサル者ハ是レ唯打撲ノ為メニ死タルカ或ハ其時偶然ニ病ヲ発シテ死タルカ是レ緊要ノ事ニシテ之ヲ決スルハ即チ医士任ナリ(発病ニ因テ死スル者ハ間々之レ有リ卒中ノ如キハ或ハ怒氣ノ為ニ発ス又心臟ノ一症ニ激動ノ為メニ発スル病アリ)若シ打撲ニ因テ死ヲ致サハ其打撲セシ者ハ是レ殺賊ナリ若シ病ニ因テ死ヲ致サハ其打撲セシ者ハ是暴人ナリ

(中略)

日本ノ法律モ近クハ各国ト同一ナルヘシ其法律ヲ施スニ至ラハ医士及ヒ裁判吏ヲ必ス此学ヲ学ハサルヘカラス医事政事科ハ死体検査ニ関カル者多シトス

以下死体検査法、死体形状などの各論に入る。

(後略)

(二) 舍密学⁽¹²⁾

教師 越尔度麗実氏 口授

総論

自然学トハ何ソ万物ノ道理ヲ究メ内外ノ形容ヲ論スル是ナリ究理学トハ何ソ單純物質ノ道理ヲ知り複合物質ノ變化ヲ論スル是ナリ今試験管ヲ取り自然学ヲ以テ之ヲ論スルハ其實透明ニシテ其形長円上ニ口アリ究理学ヲ以テ之ヲ論スレハ其造構ハ珪素曹実母酸素ヨリ成ルトス

究理学ニ於テ物質ニ三種ノ區別アリ吾五官ニ感触スルモノヲ物質ト云想像ヲ以テ分子ト云又原子ト云物質ハ太陽地球ヨリ金石玻璃蠅頭ニ至ルマテ皆是ナリ分子ハ物質ノ小部分ナリ

(後略)

(三) 生理⁽¹³⁾ 日講記聞 二 (三十六頁)

日講記聞 卷之二

二千五百三十三年第一月第七日火曜辰

生理学講義

神経系統

神経系統ハ知覚感応運動ヲ司トル第一脳即頭蓋中ニアル者第二神経節此神経節ハ体中ニ於テ大小アリ第三脊椎神経ナリ第四脳脊椎神経及神経節ヨリ分派スル処ノ神経ナリ就中背椎神経ヨリ出ルモノ多シ四肢及頭蓋神経ヲ云知覚感応運動ノ中先ツ運動ヲ説カンニ夫レ運動生スルノ器械ハ筋ナリ体内處トシテ筋ナキハ運動スルコト不能筋ニ大小アリ小ナルモノハ顕微鏡ノ有ルニ非レハ見ヘ難シ耳中ノ筋等是ナリ腓腸筋ノ如キハ最大ナルモノナリ

(中略)

第十金曜辰

神經節ハ重ニ神經細胞ニテ成立ツ神經細胞ノ形ハ種々異ナリテ或ハ長ク或ハ円シ此神經節ヨリ白纖維ヲ生メ出ス図ハ
腦中ノ神經節ナリ其神經節ニ附麗スルヤ如何ナル模様ナルヤ知レ難シ交感神經ハ灰白色ニテ即チ神經節ト全色ナリ比神
經ノ組織ヲ二種二分ツ

(後略)

(四) 生理学 日講記聞 第三 (三十二頁)⁽¹⁴⁾

耳官功用 本文略

耳部解剖 本文略

(後略)

(五) 日講記聞卷之一 治療実験⁽¹⁵⁾

第一 患者ヲ診スルニ法アリ左ノ如シ

第一歴史第二常健康第三両親何病ニテ死亡セシヤ第四父母疳瘡アルヤ亦以前如何ナル病ヲ持シヤ第五第六家業何ナル
ヤ第七(不明)第八住所第九持前第十何時ヨリ病発セシヤ第十一其后如何ナル所置ヲ受セシヤ第十二如何ナル薬ヲ用ヒシ
ヤ

凡ソ治療スル器械アリ (Microscope) 顕微鏡 (Percussion) 打聴器 (Stethoscope) 聴胸器 (Endoscope) 陰門鏡、肛門鏡
(Sund) 探隠器 舍密試験 (中略)

顕微鏡ハ溺ヲ検査スルニ最も緊要ナリ尿ヲ此器ニ照セハ病ノ原因ヲ知ル腎臟病ニ於テ殊ニ然リ時トシテ尿中ニ曲虫或
ハ鱗状虫ヲ生スル「アリ是ヲ以テ腎ノ何病タル」ヲ知ル

(後略)

(六) 眼科学⁽¹⁶⁾ 日講記聞

西二月二十日此夜眼病人アリ之ヲ診スル前ニ器械ノ用ヲ説ク

(表題と分類だけ記載する)

検眼鏡用法 網膜諸症

白内障眼及治法 角膜潰瘍

緑眼 眼瞼腫瘡

角膜諸症 電腫

眼筋諸症 モルスニム

兔眼 マセボミアン腺モリアム

斜視眼 レベロス・トモア

眼窩損傷 疣贅

眼球突出 皮角

涙管閉塞

眼瞼外翻

眼瞼内翻

(七) 薬剤学⁽¹⁷⁾

当時西洋医学で使用された約七十種の薬剤を丸剤、水剤、混和剤、軟膏、煎剤等に分類したもので、これらは自ら作成して使用したと考えられる。

丸剤

硫酸規尼涅丸 壹粒中半氏含ム

硫規ニク甘草末一ク一匁

右蒸餅ニテ為九百貳拾粒二分ツ

吐根丸 壹粒中三分クノ一含ム

吐根末一ク 甘草末半ク

右糊ニテ為九百八拾粒二分ツ

(後略)

水劑並ニ混和劑

ステレキニー子水 一氏中半氏含ム

ステレキニー子四氏 稀塩酸廿六m

アルコールニク 浄水六汚

右稀塩酸ニ溶解シ後水ヲ加ヘ混合六m中ニ二十分氏ノ一ヲ含ム

但シ用法壹次ノ量五mヨリ六mニ至ル一日三次

(後略)

(ハ) 治療学⁽¹⁸⁾ 日講記聞 第二 (四十九頁)

紀元二千五百三十三年第一月六日

西国 千八百七十三年 月曜辰

(講義日メモとして)、一月六日月、十七日金、廿六日月、二月三日月、十日月熱病論、十七日月、廿六日月チフス(熱型あり)、三月三日月間歇熱、マラリア、十日月弛張熱、マラリア(キニーネ使用)、(体温は華氏使用、藥劑はg單位である)

Endocarditis 心臓内膜焮衝

扱此病ノ理ヲ發明セシハ未タ兩三年ヲ過ス然レ共実ニ之ヲ熟察スルコト難シ此症ノ經過中其害少ナシト雖モ終ニ之カ原因トナリテ大イニ害ヲナス病理解剖上ニ於テ亦難スル処ナリ如何トナレハ此病經過中ニ死スルモノ鮮ナキ故ナリ此心臓内膜焮衝ヲ起スノ方一アリ

Lactic acid ヲ血中ニ注射セハ此症ノ模様ヲ顯スナリ London ニ於テ Richard 先生一犬ヲ捕テ其血中ニ乳酸ヲ注射セシカ忽チ此症ヲ顯ハセリ

(中略)

〔治法〕 此症ノ初起ハ危険トセス然レトモ統テ弁ノ作用ヲ妨ケテヨリ大ナル害ニ至リ近時医家ノ唱ルニ此心臓内膜焮衝ニテハ殺スコトナシ数年ヲ経テ後ニ殺スコトアリトス先ツ此原因ヲ尋ネ倭麻質斯ヨリ來レハ之ヲ治シ腎臟病ヨリ來レハ亦之ヲ治シ若シ苦痛ヲ発セハ之ヲ除カンコトヲ要ス心臓作用之カ為メニ妨タケラルルコト有ラハ実支多利斯ノ類ヲ与ヘテ之ヲ補フ可シ (後略)

(九) 智 囊⁽¹⁹⁾

明治五壬申晩冬改為

紀元二千五百三十三年

石 崎 鼎

この表題の和綴和紙ノート数冊あり、その中には英語、医学英語の勉強のためのメモなど沢山あり、余暇の勉強の程度がうかがわれる。また落書きのように自作の漢詩が沢山書かれ、感傷的になったり、北海道の風物を楽しんだりしている。

(十) 『近世医説』⁽⁶⁾⁽²⁰⁾

エルドリツジは函館在任中に『近世医説』の表題で三巻出版しているが、大西によれば第一巻は少数分冊で関係役所
知人に配布され、幻の本だという。私宅保存は二、三巻である。

表紙は黄色で、

「近世医説第二号」とあり、

裏表紙には

明 米国依兒度列智氏著

治 皇国本多公敏 訳

七

年 近世医説 第二号

五

月 開拓使蔵版

開拓使
印

第一頁には

近世医説 第二号

目次

尿道狭窄ノ説附第一、第二、第三、第四、

第五、第六図解

外科手術ニ血液ヲ消耗セサル説

附第七、第八、第九図解

指節脱臼ニ用ユル装置ノ説

附第十圖解

石炭油検査ノ説

附第十一圖解

止痛ノ説第二

産婆教育ノ説

虎烈刺病ニ銅塩ヲ用ユルノ説

砒石用法ノ説

喘息ニ用ユル新薬ノ説

嬰兒ノ下痢ニ酸化亜鉛ヲ用ユルノ説

痘瘡ニ塩酸鉄丁幾ヲ用ユルノ説

直腸内大便蓄積ニ膠ノ挿置薬ヲ用ユルノ説

梅毒性阿涅幾亜ヲ療ユルノ説

分娩後ノ出血ニ塩酸鉄丁幾ヲ注入スル説

出血ニ依兒護陣ヲ用ユル説再出

虞里斯杯油溶解力ノ説

死体新徴ノ説

犬ノ心臓及ヒ血管中ニ有スル蟲子ノ説

本文の始めに再び左記の表記あり

近世医説 第二号⁽²⁰⁾

米國 依兒度列智氏著

日本丹波 馬島 讓 閱

播磨 本多公敏 訳

本文(省略)

近世医説 第三号

裏表紙の年は明治七年九月とある。

近世医説 第三号

目次

楳毒ノ説 第一

格魯布ヲ療スル説

石炭酸主治ノ説

尿道狹窄ノ説 第二

附第一、第二、第三、第四図式

肺勞ノ療法ニ肺臟ヲ休憩スル説

三新薬ノ説

蓖麻子油用法ノ説

火葬ノ説

新發明陰門鏡ノ図

七種痘巡回日誌^⑩

エルドリツジが函館病院を辞任した翌年春鼎吾は馬島院長の命令で約五十日間、函館を中心に種痘巡回に従事した。日誌をみると最初は種痘をし、のち種痘の結果をしらべ再種痘を行ったり、種痘証明書を発行している。全域を数班に分けて、医学修行生数名が参加したと考えられる。日誌をみると種痘計画のほぼ全貌が推察できる。

記

三月廿二日 馬島先生ヨリ種痘巡回

内命ヲ得

三月廿三日 種痘巡回拜命之事

「願書

私儀此度種痘御用ニ付亀田茅部上磯三郡之巡回被仰付候間往返旅費并ニ日当御渡被下度尤種痘施行イタシ候其儀ニ付巡回并帰留ノ日数相数不申候間其積帰留五十日位ニ見込ヲ以テ御渡被下度此如本願申候也

医学修行生

石崎鼎吾

明治八年三月廿四日

會計課御中

実施は三月廿四日からで、日誌によれば鼎吾は乗馬で旅行している。同伴者の有無は不明である。初め種痘し後反応の有無を検査しているが、彼が種痘を行った村数より、検査だけの村が多く、また途中で同窓生に会ったらしい記事がある。先述の述べたように本種痘巡回には同窓数名が参加したと思われる。

(一) 巡回種痘実施方法 (日誌による)

企画者 馬島先生 (函館病院長)

担当役人 西山求春 (巡回中何回も会合)

実施者 石崎鼎吾 (種痘検査免状渡し)

場所 村の個人宅

立会人 副戸長、村用掛、書役

宿泊 個人宅 (副戸長)、旅館

峠下ホテル

種痘対象 小児、児童

種痘材料 種痘陽性児の痂をとりエキスを作成して連続使用した

(二) 巡回成績

上磯郡一〇五三人、亀田郡一〇一〇人

茅部郡 三九八人、合計二五五八人

(三) 巡回村名

亀田郡 下

亀田村

七重浜村 函館ヨリ三里

有川村 函館ヨリ三里四丁廿四間

戸切地村 吉田郡と云所有

三谷村 有川ヨリ廿五丁、近くに三好郷

富川村 三谷ヨリ三丁

茂辺地村 三谷ヨリ二里

矢不來村 茂辺地ヨリ二里二丁

当別村 矢不來ヨリ一里半

金谷村 当別ヨリ一里半

泉沢村 金谷ヨリ一里

札苺村 泉沢ヨリ一里

木古内村 札苺ヨリ二里半

爪谷村

上磯郡 上

三好村(亀田郡吉田村) 湯川 中野

清水 文月 一本木 千代田

大野 本郷 鶴野 市ノ渡

峠下 藤山 飯田 城山

七重 中島 大川 石川

桔梗野 神山 赤川 鍛冶村

下湯ノ川 深堀 志苔 上湯ノ川

鷺ノ巢 錢亀沢 亀ノ尾 石崎

茅部郡

小安 釜石 汐首 瀬木田

戸井 日浦 尻岸内 古武井

根田内 チャウシノ沢 トトホツチ

○花○ 外十一ヶ村

地図上に巡回知名を記入し、図1に示した。地名に傍線を付けた村は宿泊した村である。また種痘の行動を種痘・検査(七日後)・免状渡しに三分して、三月二十七日より五月十六日に至る間の行動として図2に示した。

日誌の一部を参考として次に示す。

三月廿九日 第八時 三谷村出発

同日午前十一時茂辺地村ニ着ス 藤本幸左衛門方ニテ種痘ス 書人小林百太郎

茂辺地村ヨリ矢不來マテ往復ス一里

村用掛村上与右衛門

池田長右衛門長女ゆみ病院ニテ種痘ナシ廿九日ハ七日目ニ当ル 種痘シテ百五十五人スム

下国邦三郎、池田長右衛門、村用掛村上与右衛門、小野寺久松、小林百太郎ト小酌ス下間浜ニ泊ル

茂辺地村種痘児童百五十五人

当別村江五時半着 副戸長高田七太郎

図 1

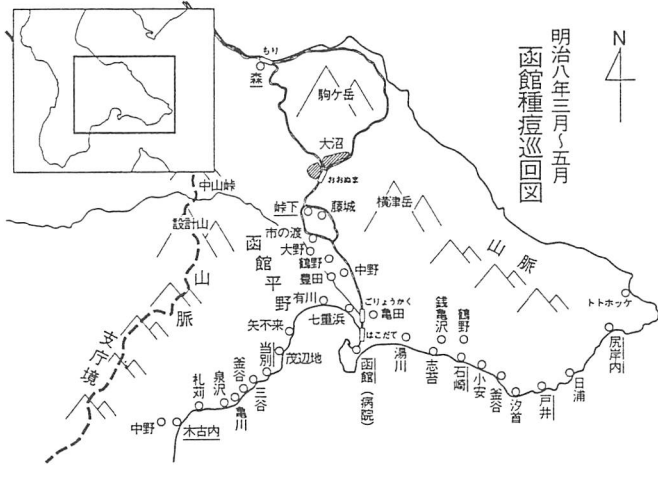
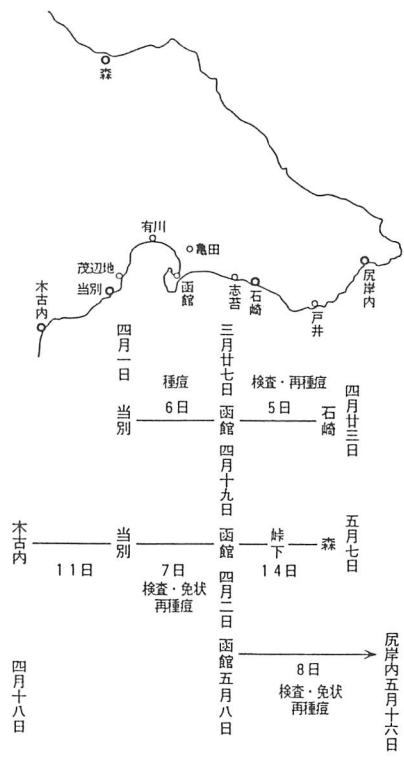


図 2



書役宇佐見喜一、村用掛菊池作右衛門

第七時 当別村誥役西田求春君ト会フ

夕景ヨリ高田七太郎、書役宇佐見喜一、村用掛菊池作右衛門、誥役西田求春君ト小酌ス

五月三日晴天 痲を漿ニ漬ス 嶺下村出発藤山村ニ至テ検査ス 同所ニテ飯田村并城山村ヲ検ス右三村種痘不善感

ナリ因テ良痘ヲ嶺下村ヨリ呼ヒ再種痘ス 午後三時富士山出発大野村平田嘉六方ニ泊ス

八、エルドリツジ氏の修行証明書⁽²¹⁾

鼎吾は函館医学学校でエルドリツジから教育を受け、更に種痘巡回を完了した時点で実父重病のため帰省し、その死亡により函館に帰らずに退学願を出した。したがって彼には修了証書がない。明治も諸制度完備につれて医師として資格が問題となった。

そこで鼎吾は恩師エルドリツジ氏に依頼して証明書を発行してもらった。

エルドリツジは明治十九年三月六日付（一八八六）で英文の函館医学学校修了証書を鼎吾に与えた。

この証書は菊の御文章付の奉書紙で、英文で証書が書かれ（ペン書き）、終りに署名と共に欧米で公文書の書式により朱（小指大）が押されている。現物を写真¹で示す。

なお彼の肩書きは元開拓使医学学校長、現（横浜の）神奈川県十全医院外科部長、中央衛生委員会委員である。

英文を印刷文で次の通り示す。

Jiuzen Iiin Yokohama

March 6th 1886

I certify that Ishizaki Teigo was under my instruction in medicine and surgery at the medical school of the Kaitakushi, Hakodate, from 1872 to 1874 inclusive, during which period he made rapid and satisfactory progress in his professional studies, and gave evidence of special aptitude for medical work.

Stuart Eldridge M. D.

Late Medical director of Kaitakushi

Surgeon Juzen Iiin, Kanagawa Ken

Member of Central Health Board

和訳すると次の通りである。

「十全医院 横浜

一八八六年三月六日

石崎鼎吾は一八七二年より一八七四年の間函館の開拓使医学学校に於て医学及び外科学につき私の指導教育を受けた。この期間に彼は職業教育の分野で急速且つ満足すべき進歩をとげた。医業を行うに特別な能力のあることを茲に証明する。

(署名) 朱印スチュアート・エルドリッジ

元開拓使医学学校校長

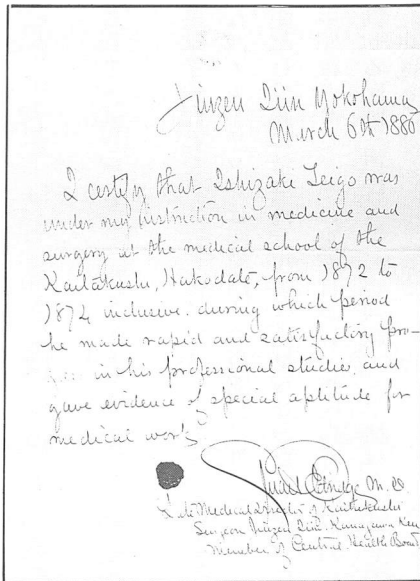


写真 1

九、考 察

文献、資料、鼎吾の記録からみた函館医学校の実状の一端を検討した。

北海道開拓の一環として医療があり、藤田の著書^{〔1〕}によればエルドリッジは函館病院外科部長に着任すると共に北海道の医療システムの改善に努力した。この際は彼は契約書を変更して彼の希望により医学校を設立したとある。しかしこれを開拓使が正式に認め官費生を派遣して、彼の在任期間中開校させた。その実態は講義・臨床指導全般にわたり殆ど彼一人で実行したと考えられる。彼は英語で講義し英語を話せる医師（病院職員？）が通訳し、生徒は日本語で記録した。但し同時に英語の教育も行った。

明治六年（一八七三）の報知新聞八月十六日号で、本多公敏は彼を紹介して「エルドリッジがその病床に臨み患者を処するを見るに、薬方技術近世欧亜の新法にして、尤も外科の手術に長ず。余輩往々これがために活眼を聞けり」とあり、学生を指導するにときに図を画き、ときに自製の模型を使い初学者でも理解できるように反復丁寧^{〔2〕}に説示した」とある。鼎吾のノートをみて、その事実は証明できる。日本医学はドイツ流になっていく中で、この医学校が米国流に教育されたのは北海道開拓使と米国の関係の結果であると考ええる。なお慈恵会医科大学は英国流医学で発足したといわれている。

鼎吾の記録から九名の官費生は変らないが私費生が函館の記録より多いことと、私費生の名が一致しないのは今後の課題である。彼が生徒取締（級長？）だった為にこの名簿が残されたと考ええる。

開拓使医学校修業生とくに官費生は五年間北海道で医療に従事する義務があつたことは外の文献には見られない。こ

れが不可能となり彼が退学願を出したと考えられる。

エリドリッジ解任後も鼎吾は函館病院にて種痘巡回を行った。肩書きが修業生となっているので学校は閉鎖されたのか続けられたのか不明である。

鼎吾の修業証書は明治十九年に発行されたことも函館医学校の在り方解明の資料と考えたい。

なお資料となった講義記録そのものはいつでも公開する用意がある。

十、結 論

エルドリッジが函館医学校を開設したとき官費生の一人として石崎鼎吾が参加して、沢山の資料を残した。これらを整理し、文献考察を加えた結果、医学校の実態の一部がかなり解明された。明治初期の医学校としては特殊な例であると考ええる。

文 献

- (1) 藤田文子『北海道を開拓したアメリカ人』一一頁、二三頁、三六頁、四六頁、四八頁、新潮選書、一九九三(平成五)年七月
- (2) 阿部龍夫『函館市医学史』一二二―一二五頁、函館中央病院刊行一九五六(昭和三十二)年
- (3) 阿部龍夫『函館の医事と医人』、一一九頁、無風帯社、一九五一(昭和二十六)年
- (4) 鈴木要吉「登録人名小記、蘭学全盛時代と蘭疇の生涯」(田崎哲郎篇『在村蘭学の展開、下野における蘭学の系譜―菊池卓』)一九八頁、思文閣一九九二(平成四)年より引用した。
- (5) 武内博編著『来日西洋人名事典』六〇頁、日外アソシエーツ刊、一九八三(昭和五十八)年、名古屋大学心理学科小島秀夫氏の調査による。

- (6) 大西泰久編著六角柱那・高雄訳「御雇医師エルドリッジの手紙―開拓使外科医長の生涯」、一三頁、二九頁、三二頁、み
やま書房、一九八一（昭和五十六）年四月
- (7) 石崎鼎吾「講義ノート・医学政事科」一八七三（明治六年）石崎達蔵書より
- (8) 石崎鼎吾「函館医学学校生徒名簿」一八七二（明治五）年九月、石崎達蔵書より
- (9) 石崎鼎吾「自筆履歴書」一八八五（明治十八）年十月、石崎達蔵書より
- (10) 石崎鼎吾「種痘巡回日誌」一八七五（明治八）年三月―五月、石崎達蔵書より
- (11) 石崎鼎吾「退学願」一八八五（明治十八）年八月、石崎達蔵書より
- (12) 石崎鼎吾「ノート・舎密学」一八七三（明治六）年、石崎達蔵書より
- (13) 石崎鼎吾「ノート・生理、日講記聞二」一八七三（明治六）年、石崎達蔵書より
- (14) 石崎鼎吾「ノート・生理学、日講記聞第三」一八七三（明治六）年、石崎達蔵書より
- (15) 石崎鼎吾「ノート・日講記聞卷之一、治療実験」一八七四（明治七）年（？不明）、石崎達蔵書より
- (16) 石崎鼎吾「ノート・眼科学、日講記聞」一八七四（明治七）年（？不明）、石崎達蔵書より
- (17) 石崎鼎吾「ノート・薬剤学」一八七四か否か不明、石崎達蔵書より
- (18) 石崎鼎吾「ノート・治療学、日講記聞、第二」一八七三（明治六）年、石崎達蔵書より
- (19) 石崎鼎吾「智囊」一八七二（明治五）年、石崎達蔵書より
- (20) 米国依児度列智著、皇国本多公敏訳『近世医説』三卷、開拓使蔵版、一八七四（明治七）年
- (21) エルドリッジ「石崎鼎吾の修行証明書」一八八六（明治十九）年三月、石崎達蔵書より
- (22) 本多公敏「報知新聞」明治六年八月十六日号エルドリッジ紹介記事、大西泰久編著『御雇医師エルドリッジの手紙』一
八三頁より引用した。

（栃木県）

A Documental Investigation of Hakodate Medical School from Records of a Student

by Tatsushi ISHIZAKI

At Hakodate National General Hospital, a medical course (Hakodate Medical School) existed from 1872 to 1874 with Governmental support, which was guided and lectured by Dr. Stuart Erdridge from Philadelphia.

From many records concerning this course written by a student who attended during this period, real features of this course were clarified. Dr. S. Erdridge gave lectures in English about the fundamental as well as clinical aspects of medicine, including surgery, and gave guidance on clinical practise and treatments. These lectures were translated into Japanese simultaneously by an interpreter for the convenience of students writing in Japanese in their note books. (75)

His lectures were on a high level for that time, so later they were published in 3 volumes by the government (Kaitakushi). The nine of those 20 students who were supported by government expense were obligated to do medical services in Hokkaido for 5 years afterward.

At the end of the course, students who took the course were engaged for 50 days in medical service which included a round trip for vaccination of small pox to children living near the Hakodate area and 2558 children were vaccinated.

From the diary of this trip, the schedule and mode of vaccination at that time were clarified.

The student who wrote this diary had to retire from this course at the last period, due to the death of his father and familial duties. However, the certificate for medical occupation was issued to him by Dr. S. Erdridge in 1886 for governmental necessity.